

令和6年3月22日

陸前高田市議会議長 及 川 修 一 様

総務常任委員会委員長 中 野 貴 徳

令和5年度 管外行政視察報告

総務常任委員会の管外行政視察の概要を下記のとおり報告いたします。

記

1 期 間 令和6年1月31日（水）～2月2日（金）

2 行政視察地及び研修項目

(1) 大阪府高槻市（人口346,643人 R6.1.31現在）

定住促進プロモーション事業について

(2) MOBIO（ものづくりビジネスセンター大阪）

現地視察

(3) 大阪府八尾市（人口260,515人 R6.1.31現在）

まちのコインについて

3 出席委員等 委員長 中 野 貴 徳 副委員長 木 村 聡

委 員 大和田 加代子 委 員 藤 倉 泰 治

委 員 鵜 浦 昌 也

随 行 山 口 透（局長補佐）

4 行政視察概要 別紙報告書のとおり

総務常任委員会行政視察報告

総務常任委員会では、今後のまちづくり施策の参考とするため、大阪府高槻市の「定住促進プロモーション事業」、東大阪市の「MOB I O（ものづくりビジネスセンター大阪）」及び八尾市の「まちのコイン」について行政視察を行なった。

○大阪府高槻市「定住促進プロモーション事業について」

50年先の将来を見据え、将来人口推計に基づく人口減と高齢化率の上昇による年度を追っての扶助費の増加という課題解決のため、「税を納めてくれる年代の人に定住してもらおう」という明確な目的を掲げた事業であり、若い世代の定住、人口増問題が高齢者も含めたまち全体の問題として位置づけられていた。

事業は関東圏から関西圏への就職、転勤等異動者に焦点をあて、転勤の任期終了後に後任者が前任者の滞在した市（＝高槻市）を選ぶことへの期待感を持ち、幅広い年齢・属性層をターゲットとせず、設定を絞り込み、集中した手法で発信しており、予算やマンパワーの面でもより効率的と感じられた。

魅力発信の方法としてはプロポーザル方式による委託事業者選定を行い、魅力コンテンツの洗い出しや組み立てについても、地の利を活かした展開を中心に、貴重な歴史遺産や文化芸術、自然環境、グルメや最近話題の「将棋」等より魅力的に磨き上げ、併せて有望な人材の登用で、この場所に住むことでどのような生活がおくれるのかをイメージさせるPR動画の作成等としている。歴史的背景を持つストーリー性豊かな構成となっており、遺跡・城跡等を市民の憩いの公園とし活用し、また、「将棋のまち」を意識し、関西将棋会館移転誘致、ラッピングバスの運行や「大好きなたかつき」をテーマに市民からのSNS投稿を促すなど、市民を巻き込む取り組みが行われていた。関西将棋会館移転のためのクラウドファンディングは「将棋のまち高槻」を知らしめる広報としての意味も大きいと思われる。

観光人口をきっかけとして、次に交流人口、移住人口と段階を上るかのような施策設計をする自治体もあるが、高槻市では交流人口拡大と、定住人口増について完全に別の目的として違う施策として棲み分けを行っており政策・施策の目指すところが明確であった。

今回は視察として説明を受けたが、その立場をこえて自分自身がここに住みたいと思ってしまうほど魅力的であった。

本市における施策についても、ターゲットを絞り込み、カネ・モノ・ヒトをより効

率よく機能することが大切であると改めて感じる視察であった。

OMOBIO（ものづくりビジネスセンター大阪）

地域の主産業とも言える製造業をさらに活性化させたまちづくりを目的とし、歯ブラシからロケットまでの言葉どおり、200もの様々な企業の常設展示や定期的に行われる各事業者間の交流等、全国のみならず世界への情報発信とビジネスマッチング、知的財産権、資金・人材、新規開発等々ものづくりに必要と思われる事全て網羅され、既存事業者だけでなく新規起業を目指す者にとっても力強いサポート体制である。

行政として企業立地の優遇制度を充実させ、工業団地を整備するなど、産業振興の受け皿をしっかりと用意し、国内最大級の常設展示場だけではなく、ビジネスマッチング、販路開拓、産学連携、経営相談、技術経営指導、各種支援制度、技能伝承、各種交流会・説明会の開催などあらゆる角度から中小企業を支え、応援する総合的な体制になっていた。また、事業継承だけではなく廃業にも対応しており、さすが歴史ある商人のまち。まさに駆け込み寺にもなる「問題解決の道が開ける」場所と感じた。大企業の課題に対し、複数の中小企業の技術やアイデアを組み合わせるビジネスマッチング推進事業は大阪におけるMOBIOならではの施策である。

施設には、年間300～400視察が訪れ、アジア圏を中心に海外からの訪問も多く、案内担当の方が熱心に語る姿が印象的であり、ものづくりが技術・経済面のみならず、誇りとして大阪の街を支えているのだと感じ、あわせて地域の産業は、長い歴史のもとに成り立っていくということを改めて実感した。

このような環境を目にすれば、ものづくり新規起業者にとっては、この地を選択するであろうとしか思えないと感じる内容であり、地域の産業を後押しすることでのまちづくりになっていると感じた視察であった。

○大阪府八尾市（みせるばやお）「まちのコインについて」

八尾市では企業数12,000に対して、製造業3,000と割合が多く、基幹産業として位置付けられている。しかし、その多くは3次4次請け企業であり、受注先の拡大、事業内容の理解促進等に対する課題があり、その対策として、公設民営施設の「みせるばやお」は、利用者の人材育成、市民に製造業に触れてもらう機会を提供している。まちのコインはこの取組から誕生した。

この「まちのコイン」の役割は、地元の様々な店舗や事業所、行政と市民とのつな

がり。また、市民同士のつながりを広げる仕組みがある。まちの活性化、中心市街地に人を呼ぶため等に留まらず、一人暮らしの方等に直接はもちろん、間接的な見えないつながりを感じてもらえるなど福祉施策にもつながると感じた。

高齢者の方の利用については人口の全てをカバーしようとせず。そこに、アナログな手伝いを周囲の方々に促すイメージを持っている。例えば自治会長さんが、「障子の張り替えをしたい高齢者がいて、自分の八尾コインでお手伝いを募集してあげる」といった活用などであり、本市の地域でも使われそうな用途だと感じた。

事業展開の最小規模では1,000人程度の自治体でも活用事例があり、1万人を超えると実装しやすくなるとのことで、本市の人口規模であれば、実施可能性が高いことを伺えた。

まちのコイン導入に関する「コミュニティ参画の見える化による新たな価値創造に関する八尾市産業振興連携協定」のK P Iの設定が明確で分かりやすく、課題が明確になり、共有できる。K P I設定の際に留意すべきと思われる。

本市においても、地元産業と資源を踏まえた「まちづくり」を展望し、地域経済振興基本条例等の制定を見据え、協働の観点からも市民・地元事業者とともに進める必要性・重要性をこの視察を通じて改めて感じたところである。